

研究通信

No. 17

1955年10月刊

村落社会研究会
編集部

東京都文京区本郷
士町、東京大学
学部社会学研究室

農村過剰人口の

概念についてのノート

(東京) 小池 基 之

労働人口の「過剰」がいわれる場合、それは、資本によつてつくられる労働力の需要に對する過剰として、はじめて問題とされるので、したがつて、それは資本制生産方法に特有なものといふべきである。このような見地から、過剰人口の三つの形態——流動的・潜在的・停滞的過剰人口——が区別されているのである。

資本制的生産が農業におこなわれ、そこに機能する資本が蓄積されるにつれて、農村労働人口に對する需要は絶対的に減少するので、農村人口の一部はたえず都市プロレタリアートやミニエンプラクティブのプロレタリアートに移行しようとする相対的過剰人口の源泉を形成することとなるが、農村におけるこのような相対的過剰人口は潜在的過剰人口とよばれる。都市への労働力の流動は農村におけるたえざる潜在的過剰人口の存在を前提とするのである。一方、農業労働者は普通小農民経済あるいは零細農民経済から供給さ

れ、農村過剰労働力はつねになんらかの形でこれらの経済と結びついている。これらの経済における小土地所有あるいは耕作は、労働その他による収入を補う手段であつ、あるいは仕事がない場合、どうか生活維持していくための手段である。ここに、農村過剰人口が「潜在的」となる理由がある。そして、それが「排水渠が例外的に広く開かれるとき」のみである。

したがつて、資本が農業を外からとらえ、小農民経済のなかでの資本の蓄積を阻害しているという場合には、資本の蓄積が阻害され、過剰ならしめること自体が農村の人口を過剰ならしめる一つの要因として作用し、農村人口のかなり部分を、いわゆる農村過剰人口に潜在的過剰人口ならしめずにはおかない。この場合には、小農民は事実上の賃労働者として、一方では資本制工業その他への賃労働のたえざる供給源となり、他方では低い生活水準と慢性的窮乏のもとにおかれているのである。このような、たえず都市プロレタリアートへの移行の源泉となつてい、慢性的窮乏の状態のうち、農村の潜在的過剰人口を把握すべきである。したがつて、「土地不足」は小農民経済における相対的・潜在的過剰人口の一つの表現であり、未墾地解放の要求——たとえは——はその解決のための一つの努力である。このような点から、地主制およびその残存のものにおける農村過剰人口の解明への一つの通路がとめられるであろう。「土地不足」はもはや農家人口に對する道正規模の創設といつた意味で解さるべきではない。

農家の労働力が賃労働として雇傭される場

合でも、必かにしてその就業は不規則である。たとえは農繁期雇傭にしても、あるいは山仕事その他にしても、つねに、特定の雇傭主をもつてゐる場合は、むしろ稀である。このようにして、これらの労働力はまた、停滞的過剰人口としての役割をはたす。

農村過剰人口は、このような二重の形態においてとらえらるべきである。共通過剰農村過剰人口の問題についての調査結果を整理するに當つて、基礎概念をめぐるいわば「感想」を記した次才である。